「大倉式尺八〈わかまつ〉」大正12年(1923)ごろ 大倉集古館蔵

田中 知佐子

はじめに

大倉喜七郎(1882 ～ 1963)が尺八の改良を構想し、オークラウロを考案・公表したのは昭和 10 年 (1935) であった。それに先立つ大正 12 年(1923)1 月、雑誌『三曲』に発表した論考「楽器としての尺八改良意見」〔注 1〕の結語に、“自分は飽迄も此の主張の下に、趣味としての吹奏の旁ら物理学的にもあらゆる研究を続けた、而してその結果を得た、兎に角稍や理想に近いものを得て実現しておる (中略)、何れ機会を得て公表するつもりである” とあり、この時すでに改良尺八の試作品が完成していたことが示唆されている。この試作品がどのような楽器であったのか、同論考中に具体的な説明はないが、大正 14 年(1925)8 月 15 日に出願された特許第 67689 号「尺八歌口装置」の広告(添付資料)に掲載されている“發明ノ詳細ナル説明”(文中に“「ボエム」氏指法”とある)と挿図の“第一圖”を見る限り、金属製で、ベーム式のキイ装置を備えていたらしいことが分かる(添付資料参照)。本稿では、「大倉式尺八〈わかまつ〉」(図 1) がこの試作品である可能性があるとみて論考を進めることとする。なお、本管については拙著『大倉喜七郎とオークラウロ』〔注 2〕にも細部の画像が掲載されているので、併せてご参照頂ければ幸いである。

1. 試作品製作までの経緯

まずは、喜七郎が昭和 11 年(1936)に行った「オークラロについて」という講演の記録〔注 3〕から、オークラウロ考案の経緯を振り返ってみたい。明治 40 年 (1907) におよそ 8 年間留学していたイギリスから帰国した喜七郎は、父・喜八郎から自動車レースや飛行機などの危険なスポーツを禁じられ、“ぢや何か音楽をやらせてください” となった。幼少時から音楽が好きで、留学中にはバイオリンも習ったが、結局尺八を始めた。当時は旦那衆の間で尺八を嗜むことが流行していたのだ。長く欧州で暮らし、日本や日本人を客観視した経験が、逆に日本文化への回帰に繋がったのだろうか。当代一の名人であった三代目荒木古童 (琴古流・1879 ～ 1935)や、都山流開祖の初代中尾都山(1876 ～ 1956)に習うなど、尺八にはかなり入れ込んだが、次第に“どうも物足りない”と思うようになった。“(尺八の音色に)明る味を與へて外國の曲も吹けるものを拵えたい”との考えを起こして、東洋(日本)の十二律と、西洋の平均律、純正律、ピタゴラス音律を合わせ、半音階(クロマチック)の音が出せる新しい笛、を作るという理想を掲げて研究を始めた。“一番初めは西洋の横笛に尺八の歌口を附けて見ればそれで宜いのではないかと思ひましてそれで自分で試驗して見たが、西洋の横笛に歌口を附けて見ると鳴ることは鳴るけれども音程が全然違って了ふ”ということに気付くと、高等数学が趣味の喜七郎ならではの持ち前の理系脳を発揮したのか、“日本の尺八式の笛を拵へて夫に西洋の一般行はれて居る指法を應用することに考へ直し、そして色々計算して割出し、尚計算の外に實驗をして見てそれを一々證明してこつこつと” 研究を重ね、“皆さんにお聴かせ申上げるやうな次第”になったという。

こうした言説から勘案すると、喜七郎はオークラウロ(当初は大倉笛と呼ばれていた) 考案の嚆矢より “西洋の横笛” すなわちフルートを利用することを想定していたようである (尺八もフルートもエアリード楽器)。明治以降にヨーロッパから日本に公的に輸入されていたフルートは、主にメイヤー式であった〔注 4〕。大正 10 年(1921)ごろにフルート奏者の岡村雅雄(1892 ～ 1961)が留学先のアメリカからヘインズ社製のベーム式フルート 1 管を持ち帰ると、メイヤー式に比べて低音が豊かに鳴る楽器の性能に着目した村松孝一(村松フルート製作所創業者・1898 ～ 1960)は、大正 13 年(1924)に国産フルート第 1 号をベーム式で製作した。大倉笛の研究時期は、ちょうど日本におけるベーム式フルート黎明期に重なっている。その前年 6 月、新進気鋭のベーム式フルート奏者・クロッケル氏の来日を報じる記事の中に、“大倉さんの発明された銀製の大倉式笛” の未来に期待するとの氏のコメントが紹介されている〔注 5〕。この時クロッケル氏は帝国ホテルに滞在しており、当然ながら喜七郎と面会し、“大倉式笛”を実際に手に取っていたことだろう。つまり、この時期にはすでにベーム式で金属製のオークラウロ試作品はほぼ完成していたとみられる。

2.「尺八管」の研究

「大倉式尺八〈わかまつ〉」に目を転じよう。管体は真鍮製で銀メッキ仕上げである。頭部管・胴部管・足部管に 3 分割できる。オープン G♯タイプのベーム式であるが、足部管の左右にトーンホールとキイが付くなど、普通のフルートとは異なる部分もある。本体上部のジョイント部分に取り付けられた楕円形プレート (図 2) には、〈大倉式尺八　わかまつ　特許六七六八九号〉の刻印があり、この特許は先にも触れた「尺八歌口装置」のものである。また、その下に刻まれている < 新案特許　一六四二七一号 > は昭和 6 年(1931)5 月 15 日に出願された「立笛指掛装置」のものである〔注 6〕。本管は平成 24 年 (2012) に当館に収蔵された。前所蔵者である泉州尺八工房の三塚幸彦氏は、本管をその数年前に骨董商から入手したということだった。

本管のサイズは長さ 585mm、内径 21mm である。1930 年代にイギリスの老舗フルート・メーカー RUDALL, CARTE &CO., LTD. LONDON のフルート職人 Charles Morley が試作したソプラノ・オークラウロ〔注 7〕や、同時期に日管(日本管楽器株式会社)が製作した MIRABLIS AUDITU TOKYO 刻銘のある量産型オークラウロと比較すると〔注 8〕、15mm ほど短く、2mm ほど太い。本管の規格が他のオークラウロと異なる理由について、本管の修理に当たった尺八製管師でもある三塚氏や、尺八奏者でオークラウロ演奏の第一人者である小湊昭尚氏から、以下のような知見を得る事が出来た。①管が短いのは尺八の一尺八寸管 (D 管) の長さに合わせるため、②径が太いのは尺八に寄せた強い音色を鳴らすため、③足部管左右に加えられた指孔は尺八の筒音(全部の指孔を塞いだ音律)に近い音を出すため、とのことである。こうした特性を踏まえると、本管はなるべく尺八に近い性能を目標として、研究が進められた楽器であったと理解されよう。

当然ながら管の長さの違いがスケール設計に及ぼす影響は大きく、実際に本管をピアノなどの西洋楽器との合奏に用いた際には、頭部管を胴部管から 15mm ほど抜いてピッチを調整する必要が生じた。一流メーカーである RUDALL, CARTE &CO., LTD. LONDON の職人が、その欠点に気付かないはずがなく、それ以降に作られたオークラウロのソプラノ管の総長はほぼ 600mm に統一されている。これは、足部管の端から歌口(フルートはリップ・プレート)までの長さにおいて、通常のコンサート・フルートの規格に準じたことを示している。また、大量生産によるコストカットと一般販売を目論んでいた当時の状況からすれば、径が太いためにフルートと共通のパイプが使えない場合、特注によってコストが嵩むことになる点も、頭の痛い問題となった管である。

「樂器改良研究會　一九三五年度(昭和十年)報告」のオークラウロに関する項目に、“尺八管 (即ち尺八八寸 D 調管) も一本だけ作られてあるが、目下是は發展せしめない豫定である”との記述がある〔注 9〕。ここでいう“尺八管”こそが本管であり、大倉笛研究の初期段階で制作された試作品であったと推察される。販売用モデルの製造過程において、本管のような規格外の笛は淘汰されることになったのだろう。

3. 村松孝一と〈わかまつ〉

さて、最後に検討したいのが、本管のプレートにある〈わかまつ〉の刻銘についてである。国内外にそのような名称のフルート・メーカーは見当たらず、そもそも大正中期ごろまでは、陸軍軍楽隊、宮内庁、東京音楽学校(現東京藝術大学)を始め、国内で公式に用いられていたフルートはすべて海外からの輸入品であった。国産フルートを最初に作った村松孝一は、喜七郎や日管からオークラウロ製作を頼まれたものの関与しなかった、と後に手記「笛作り三十年」に記している〔注 10〕。しかし、村松夫人の談話〔注 11〕や、かつてオークラウロ奏者だった山川直春の随想〔注 12〕に、村松が当時オークラウロを作っていたとの記述が確認できるため、実際にはオークラウロ製作に携わっていたと推察される。村松がそのことを伏せるようになった理由は正確には分からないが、戦後にオークラウロが急速に廃れてしまったために、積極的な関与や、肯定的な見解を述べにくい心理が生じたのかもしれない。

ところで、作家の芹沢光治良(1896 ～ 1993)は、自らの著書〔注 13〕に大倉喜七郎やオークラウロについての想い出を書き記しており、それによると喜七郎は“愛用のフルート(筆者注：大倉笛のことか)の音色について不満があって、フルートをつくりかえたいと、長く考えていたが、東京でフルートの若い先生に相談したところ、フルート製作者をつれて来た。三人で何度も相談して新フルートを造ってみては、検討して、三年目に満足する物ができて、オークラロと名を付けた” と話していたという。芹沢は昭和 10 年(1935)に設立された「日本ペンクラブ」で、島崎藤村 (1872 ～ 1943) の求めに応じて会計主任を務めていた。同クラブを支援していた喜七郎夫妻との定期的な食事会に同席していたために、それらの事情を知り得たとのことである。喜七郎は藤村の詩をオークラウロのための曲の歌詞に使用していたが、藤村が著作料を受け取らなかったことを気に掛けていて、“長い間の心の負担を払えると喜んでペンクラブの資金援助をした” のだそうだ。この当時、国内でフルート製作者といえば、村松以外に考えられず、芹沢の述懐が確かならば、村松は構想段階からオークラウロ製作に参画していたことになる〔注 14〕。

また、近年出版された RUDALL, CARTE &CO., LTD. LONDON の回顧録には、“Baron Okura returned to Japan and is said to have been involved in setting up the Muramatsu flute-making company, who may have produced more Okraulos(ママ) instruments” (大倉男爵は日本に帰ってから、オークラウロを更に製作したかもしれない村松フルート製作所の設立に関わったそうである) との興味深い記述が見られる〔注 15〕。おそらく当時の大倉組関係者か、あるいは喜七郎本人が、RUDALL, CARTE &CO., LTD. LONDON で村松に関する話題に触れたものと思われ、村松がフルート工房を起こす時期にはすでに、喜七郎やオークラウロとの繋がりが深かったことを端的に示すものといえよう。

村松が「笛作り三十年」〔注 16〕の中で “岡村雅雄氏が米國から帰ってフリュートを吹いたのを聞いて C の音が聞こえたといって騒いだものだ” と述べている笛は、先にも触れた通り岡村が大正 10 年 (1922) にアメリカから持ち帰った “ベーム式ヘインス社 (原文ママ) 製銀管” 〔注 17〕のフルートであった。岡村のベーム式は当時評判を呼び、“何処へ仕事に行っても先ずフルートを見せて呉れと云われた”そうである。村松は“(岡村は)専門家ではなかったが、俄然日本一のフリュート吹きになってしまった” とも述べている。後にフルーティストとして活動することになるものの、当時はプロ奏者ではなかった岡村が低音の C や D を豊かに鳴らすことが出来たのは、楽器の力が大きいと村松は考えたようだ〔注 18〕。このころは日本ではまだ珍しかったベーム式フルートの存在を、喜七郎に教えたのは、ほかならぬ村松であったのかもしれない。欧米から最新の楽器を手に入れられる立場にあった喜七郎がそれを聞いて、ベーム式キイ装置をいち早くオークラウロに取り入れたとしても時期的に矛盾しない。

村松フルート製作所の公式ホームページに掲載されている「村松孝一 経歴」〔注 19〕によれば、昭和 7 年(1932)以前は材料に銀ではなく真鍮や洋白を用いていたとあり、これは「大倉式尺八〈わ

かまつ〉」の材質が真鍮である点に合致する。また、村松は「笛作り三十年」に、初めて自作したフルートが“某管楽器工場”でヤスリや溶接の技術面で酷評されたとの想い出を綴っている〔注 20〕。これらの描写は、本管の工業的な仕上がりが技術的に未熟で粗削りである点を想起させる内容であるともいえる。彼がフルートを自作し始めた大正 12 年（1923）ごろは、オークラウロ（大倉笛）の試作が進められていた時期と完全に重なっている。これらの状況を総合すれば、〈わかまつ〉の製作者が村松である蓋然性は高いだろう。村松は国産フルート第 1 号を製作する傍ら、喜七郎から資金を得て「大倉式尺八〈わかまつ〉」を製作した。そして、これがプロトタイプとなって、1930 年代に RUDALL, CARTE &CO., LTD. LONDON や日管でオークラウロが作られるに至ったと考えられる。

おわりに

以上、「大倉式尺八〈わかまつ〉」について考察してきた。本管は、大正12年（1923）ごろに製作されたオークラウロ（大倉笛）の試作品であり、尺八の性能を取り入れた「尺八管」として研究された楽器であったが、結局実用には至らなかった。また、本管の製作には、村松フルート製作所創始者の村松孝一が携わっていた蓋然性が高いことも指摘した。村松が製作した記念すべき第1号のフルートは、現在は行方知れずとのことなので、本管と見比べることが出来ないのは残念である〔注21〕。兎に角、本管が曲折を経て、当館に収蔵されることになったのは、まさに運命的な巡り合わせと言えるだろう。本稿を通じて、オークラウロと黎明期の国産フルート製作の関係が、詳らかにされる一助となれば幸いである。

〔注 1〕: 大倉喜七郎「楽器としての尺八改良意見」『三曲』第 19 号、美妙社、1924 年

〔注2〕: 『大倉喜七郎とオークラウロ』田中知佐子著　大倉集古館、2015 年・2019 年改訂

〔注3〕: 大倉喜七郎「オークラロに就て」交詢社講堂、昭和 12 年（1937）7 月 5 日。この記録文の末尾に、〝この笛の名前でございますがオークラロと申しするのは先般亡くなられました伊庭孝先生が命名されたのでギリシヤに昔縦笛に「アウロス」と云うものがあつた。それに大倉の名前を附けまして「オークラアウロス」これを短かく致しまして「オークラウロ」と致しましたのです。ところがオークラウロとすると一般の人がオークラ、ウロと讀む、オークラを省いて了って簡単に、「ウロを吹く」などと言われるとどうも饂飩みたいな食べ物の様な氣がしてそれぢゃ「オークラウロ」のウの字を抜かせば宜くはないかと云うので「オークラロ」と致して発表致しました次第でございます、とある通り、昭和 13 年（1938）には「オークラロ」の名称でも商標登録された。ただし、本稿では当初命名された通りに「オークラウロ」を引き続き用いることとする。

〔注4〕: 丹下聡子「村松孝一研究（1）ベーム式フルート製作の始まり―明治期から昭和初期における国内の楽器情況―」『愛知県立芸術大学紀要』No.45、2015 年　参照。岡村雅雄も〝大正十二、三年頃日本ではまだ古い型の木管六穴に鍵のついたマイヤーシステムとかアルバートシステムとか呼ばれるものを吹いて居た人が職業人（筆者注：フルート奏者）でも随分あった〟と回想している（『日本フルート物語』近藤滋郎著　音楽之友社、2003 年、135 ～ 6 頁）。岡村は後にテオバルト・ベームの著作を翻訳した『ボエム式と其の奏法』を日本フルートクラブの配本に記載するなど、日本におけるベーム式フルートの普及に尽力した。

〔注5〕: 『朝日新聞』大正 12 年（1923）6 月 11 日夕刊

〔注6〕: 「尺八歌口装置」、「立笛指掛装置」は共に、本管に後付けされたアクセサリであると考えられる。大正 14 年に先ず楕円形プレートが設置され、昭和 6 年に追加の刻印がなされたのであろう。昭和 10（1935）年に撮影された〈わかまつ〉の写真では不鮮明ながらどちらの刻印も確認することが出来る（図 3）。

〔注7〕: 1930 年代に、RUDALL, CARTE &CO., LTD. LONDON で 9 管のサイズとピッチが異なるオークラウロが作られたという（Robert Bigio, *Rudall, Rose & Carte, The Art of the Flute in Britain,* Tony Bingham, 2011,P・150）。当 館が現在所蔵しているのは、ピッコロ（F 管）、ソプラニーノ、ソプラノ、アルト、バッソ（バス）の 5 管。

〔注8〕: 昭和 10 年 5 月当時、すでに 10 管のオークラウロを日管（日本管楽器製造所）が制作し、量産体制に入っていたことは、「樂器改良研究會　一九三五年度（昭和十年）報告」（KOK 事務所、1935 年、6 頁）のオークラウロの項に記されている。

〔注9〕: 「樂器改良研究會　一九三五年度（昭和十年）報告」KOK 事務所、1935 年、6 頁

〔注 10〕: 村松孝一「笛作り三十年」（十三）『日本フルートクラブ月報』1953 年 6 月号、1-2 頁

〔注 11〕: 『PIPERS』5 号、杉原書店、1981 年、32 頁

〔注 12〕: 山川直春「オークラロの話」『日本音楽集団第 92 回定期演奏会プログラム』、1986 年 2 月 7 日、4 頁

〔注 13〕: 『人間の意志』芹沢光治良著 新潮社、1990 年、53-57 頁。大倉喜七郎は島崎藤村に麹町の家屋敷を提供するなど、経済的な援助を行っていた。藤村はその御礼として、製本した『夜明け前』の原稿を桐箱に納めて喜七郎夫妻に献呈した。

〔注 14〕: 村松は「笛作り三十年」（十三）に戸山学校の先輩・山口常光氏を通じてオークラウロの仕事に誘われた、と記している。

〔注 15〕: Robert Bigio, *Rudall, Rose & Carte, The Art of the Flute in Britain* ,Tony Bingham, 2011, P・150.

〔注 16〕: https://www.muramatsuflute.co.jp/history/30years/「ムラマツ・ヒストリー 笛作り三十年」

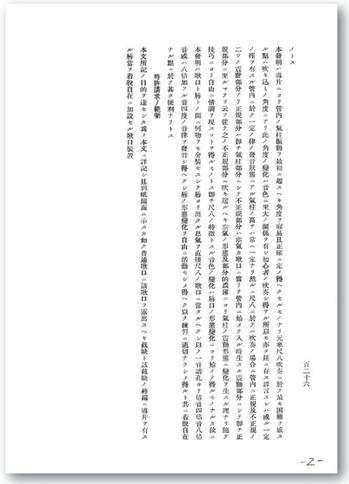
〔注 17〕: 『日本フルート物語』近藤滋郎著　音楽之友社、2003 年、136 頁

〔注 18〕: 丹下聡子「村松孝一研究（1）ベーム式フルート製作の始まり―明治期から昭和初期における国内の楽器情況―」『愛知県立芸術大学紀要』No.45、2015 年、160-161 頁

〔注 19〕: https://www.muramatsuflute.co.jp/history/koichi_history/「ムラマツ・ヒストリー　村松孝一　経歴」

〔注 20〕: https://www.muramatsuflute.co.jp/history/30years/「ムラマツ・ヒストリー 笛作り三十年」

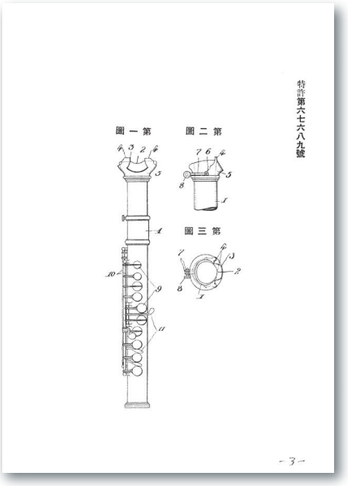
〔注 21〕: 「孝一伝！～フルートに捧げたパイオニアの生涯～第 3 回 1923 ～ 1930: 日本初の国産フルート製作開始」『季刊ムラマツ』Vol.161、2023 年、28 頁

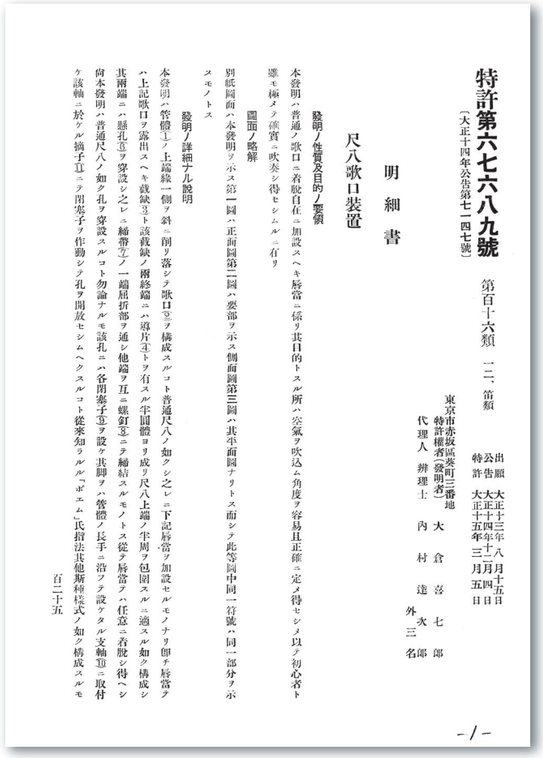


特許第六七六八九號

明細書

尺八歌口裝置





特許第六七六八九號

明細書

尺八歌口裝置

資料：特許第67689号「尺八歌口装置」　大正14年（1925）

図1：大倉式尺八〈わかまつ〉
大正12年（1923）ごろ

図2：大倉式尺八〈わかまつ〉部分

図3：大倉式尺八〈わかまつ〉
昭和10年（1935年）撮影

参考画像1：オークラウロを演奏する大倉喜七郎　昭和11年（1936年）撮影

参考画像2：村松孝一（1898～1960）写真提供：株式会社 村松フルート製作所